

特集

開かれた 藝大の窓口

大学美術館と奏楽堂、一〇年の展開

一九九八年にオープンした奏楽堂と翌年開館した大学美術館。

一〇年におよぶ活動は広く社会に認められ

上野の杜の芸術拠点として定着した感がある。

藝大の窓口の役割を果たす二つの施設の

これまでを語るとともにこれからを展望する。

薩摩雅登

大学美術館 教授

古田 亮

大学美術館 准教授

大石 泰

演奏芸術センター 准教授

松島 穆

演奏芸術センター スタージマネージャー

構想の実現、活動の持続

司会 「藝大通信」では第四号と第五号で大学美術館と奏楽堂を特集しました。今回は、一〇年が経過した二つの施設を振り返るとともに、今後どのような展望や構想を持っているかについてお話をうかがいたいと思います。

薩摩 私は一九九〇年代前半、東京都現代美術館の準備室で設立の事に携わってまいりました。現代美術館がちょうど完成するこ



薩摩雅登 (さつま・まさと)

教授—大学美術館

1956年東京生まれ。早稲田大学第一文学部美術史学専攻卒業。
早稲田大学大学院文学研究科西洋美術史学専攻博士課程満期修了。
ヴェルツブルク大学哲学部留学。
東京都教育庁新美術館（現代美術館）建設準備室学芸員を経て
1994年東京藝術大学芸術資料館助手。
2007年より現職。

ろ、こんどは藝大から、美術館設立の構想を進めるのでスタッフとして来てほしいと話があり、一九九四年一〇月一日ここに來

ました。同年一二月からハード部門を六角鬼丈教授（当時）が、ソフト部門を越宏一教授が中心となって本学の美術館構想を約三か月という短期間でまとめあげたんです。あのときは、大学の教員方の集中力はすごいものだとほんとうに感心しました。

一九九五年の秋に補正予算がつき大学美術館の建設が決まり、そこから一気に建設が進み、一九九九年秋に開館しました。で

すから、具体的な構想から完成までほぼ五年しかかかっていないんです。

大学美術館の柱は二つあります。一つめは三万八千点以上のコレクションの数々です。二つめは学内での教育研究成果をなるべくリアルタイムに展示し、社会に公開することです。そうした構想を実現するために、明確に機能区分した四つの展示室、展示面積よりも大きい収蔵庫、調査研究を行うための充実したバックヤードを持つ、地上四階、地下四階の設計がなされました。展示室が地下階と三階に分かれているのは、

全展示室を使用する大きな展覧会には不都合もありますが、当時はそうした企画展・特別展を想定していませんでした。

ところが開館してまもなくすると、東京の上野という好立地に、これだけの展示空間ができたのですから、外部からの持ち込み企画が出てきました。現在では、そうした企画展も柱の三本めに加わったのです。一〇年かかってようやく、バランスの取れた方針が見えてきたというのが現状です。

大石 奏楽堂設立の構想と目的について当時の資料を見ると、音楽学部と美術学部の枠を超えて新しい舞台芸術の創造の場となるような施設をつくらうということだったようです。もともと音楽学部には旧奏楽堂があり、そこでコンサートや卒業式を行っていたのですが、非常に手狭になるとともに老朽化したため、台東区の協力のもと解体修理して上野公園内に移築しました。それ以来、学内には設備が整ったコンサートホールがない状態がずっと続いていました。演奏会を開くにも学外のホールを借りなくてはならないという不便を解消するため、新しいホールをつくらうという構想はあったのですが、なかなか実現には至らず、ようやく一九九八年に実現しました。それを機に社会に向けてさまざまな情報を発信していく基地ができたのです。

古田 藝大コレクションの特徴は、大学と

いう現場でつくられてきたものであるという点にあります。学生の卒業制作や修了制作の買い上げ、有名なものでは画像などが毎年蓄積されていっています。そうしたシステムが構築されていくなかに大学美術館はあるわけですが、自動的にアーカイブ化されていくものをただ貯めているだけではなく、いかに見せるかということが重要になってきます。それには見せる技術を駆使することで初めて展示といえるものになるわけです。大学美術館は、いい展示とはどういうものかということ率先して発信していかなければなりません。「コレクション展」を中心に大学美術館の方向性を打ち出していくことが必要なのです。

単なる「名品展」ではなく、自ら明確なテーマを打ち出していく。切り口を鮮明にした括りを選ぶと、同じ作品群でも違うように見える。それこそが展示の醍醐味であるわけです。模索を続けてきた「コレクション展」ですが、一〇年かかってようやく軌道に乗ったところだと思っています。

松島 私は演奏企画の側面からではなく、「音響空間」としての奏楽堂についてお話ししたいと思います。奏楽堂ができたばかりのころ、藝大フィルハーモニアの練習を聴いたことがあります。そのとき反射音が多すぎて、響きがものすごくいなかで練習していたことが印象に残っています。

コンサートホールというのはティンパニ（打楽器）にヒントを得ているんです。ティンパニは、中心を叩いても音にならないので、奏者は中心から離れた部分を叩きます。中心からエッジまでを三等分して、エッジから三分の二までをひっくり返した状

態が、ホールの基礎構造だと思っんです。そうすると三分の二までがステージで、正円でも楕円でも円みの応用をきかせればいいんですね。

またティンパニの胴体のなかはでこぼこなんです。ポルトガルのカトリック教会で、土台を乗せるコンクリートの部分に、畑の畝のような状態で床板を敷いてあるのを見たことがあります。つまり床下の部分がティンパニと同じデコボコした構造なんですね。日本の太鼓、三味線、琴も、なかには溝ができています。要するに乱反射しているわけです。そういった状態がホールの空間にあると音の流れとしてもよいと思っています。

奏楽堂でも、オルガンのシャッターを全部飛ばしてしまうとパイプの丸みがありま

す。その丸みを利用すると乱反射するでしょう。客席のほうは左右対称だから、必ず同じ方向に音が集合してしまうんです。だから客席の中央で聴くよりは、端や奥のほうで聴いたほうが聴きやすいという現象が起きるんですね。

学外連携と多彩なプログラム

薩摩 一九九〇年代前半に、文部省が「ユニバーシティ・ミュージアム構想」ということを提唱し始めました。これは明治以来の伝統を持つている国立大学には多くの学術標本などの資料が秘蔵されているはずなのに、ある先生の集めた資料が、研究室を引き継ぐ人によっては必ずしも大事に扱われずに、どこかに死蔵されてしまうという

ことが起こり得るのです。そうしたものを整理し、展示していかうという構想です。九州大学の人骨コレクションや、東京大学の植物のタイプ標本など理科系の資料がほとんどです。そうした流れのなかで、大学美術館は比較的早い段階で開館することができたのですが、立場としては、美術・芸術資料に特化した「ユニバーシティ・ミュージアム」になるわけです。

藝大の大学美術館が、ほかのユニバーシティ・ミュージアムと決定的に異なるのは、先ほども言ったように上野という魅力的な立地条件なんです。しかし、ここはあくまでも大学の美術館ですから、持ち込まれた企画に対して、貸し会場の利用を認めるわけにはいきません。ですから、どんな企画でも藝大の側から対案を出して、議論をしながら進めていくことがほとんどです。

あるいはこちらから発案してメディアに協力を依頼するような事例もあります。いずれにしても、大学の美術館として内容的に恥ずかしくないものを選別していかなければなりません。設立当初はタイピングやノウハウがうまくつかめず、集客はあったが内容的にはいかがなものかとか、内容はよかったが人はあまり入らなかったといったことがありました。最近では広報を含めてバランスがとれるようになってきたと思っています。

そうしたなかで私が最も印象に残っているのは、「ルーヴル美術館展―古代ギリシア芸術・神々の遺産―」展（二〇〇六年六月一七日〜八月二〇日）です。日本テレビのメセナ事業で、ルーヴル美術館の「モナ・リザ」の展示室の改築と、続いて「ミ



古田 亮 (ふるた・りょう)

准教授―大学美術館

1964年東京生まれ。東京藝術大学美術学部卒業。

東京藝術大学大学院美術研究科修士課程芸術学専攻（日本・東洋美術史）修了。

東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻（芸術学）博士後期課程中退。

東京国立博物館美術課絵画室研究員、東京国立近代美術館主任研究官を歴任。

2006年より現職。

口のヴィーナス」の展示室の改築を行うこととなり、改築のあいだ彫刻作品を収蔵庫に納めておくよりも、「ミロのヴィーナス」以外の彫刻であれば日本にお貸ししましょう、というところから始まった企画でした。ところが、ただルーヴルから彫刻を持ってきて「古代ギリシア彫刻展」と銘打つても、日本の西洋美術史の研究レベルはそんなに低くないですから、あまり意味がないと思つたのです。

そこでたまたま私がドイツの大学でギリシア陶器を副専攻にしていたということもあり、彫刻のほかに陶器も加えたテーマを設定し、本学ならではのテーマを持った展覧会となつたのです。結果的にルーヴル側も非常におもしろいと評価してくれたのは、縦割りの組織となつているルーヴル美術館では、ありえない展示だつたからなんです。

大石 「藝大とあそぼう」(本年七月四日)のチラシを持って来たのですが、主催のところに東京藝術大学音楽学部と東京藝術大学演奏芸術センターが併記されています。これは、奏楽堂で催される演奏会には二種類あつて、その主体によって表記が変わってくるのです。オペラや学生オーケストラの定期演奏会など音楽学部が主体の場合、主催の表記は東京藝術大学音楽学部が先に来ます。「藝大とあそぼう」のように、演奏芸術センターが企画、主導して制作するコンサートの場合は演奏芸術センターの表記が先に来るのです。音楽学部主催のコンサートは、学生たちの日ごとの教育研究成果を披露するという性格が強いわけですが、演奏芸術センターが主導しておこなうコン



大石 泰 (おおいし・ゆたか)
准教授—演奏芸術センター

1951年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。
テレビ朝日でテレビ番組、コンサートのプロデュース、構成演出を務める。
2004年より現職。

サートは、企画そのものにメッセージが込められているといった違いが両者にはあります。

演奏芸術センター主催の演奏会には三つの柱があり、一つめは「藝大の響き」というシリーズです。これは音楽学部の様々な専攻の垣根を取り払い、共同で演奏会を企画していくこうというものです。その最も端的なものが、作曲家を取り上げていく演奏会シリーズで、今年度はメンデルスゾーン、ヘンデル、ハイドンを。各科が作曲家の曲をさまざまな角度から取り上げて、全体として強いメッセージとして伝わっていくという仕組みの演奏会です。

二つめは「奏楽堂シリーズ」です。こちらは各科の独自性を打ち出していく演奏会で、たとえばオルガン、歌、管打楽器のシ

リーズなど、各専攻が自分たちならではの企画を前面に出していく演奏会シリーズとなっています。

三つめは「藝大21」で、これが演奏芸術センターの特色がいちばん強く出るシリーズとなつています。「いま」という時代を見つめて新しい試みに挑戦しており、「ジャズin藝大」やアジアに着目する「アジア・躍動する音たち」、現代音楽を紹介する「創造の杜」などのプログラムがあります。

もう一つ触れておきたいのがモーニングコンサートです。これは四十年近い歴史のあるもので、藝大フィルハーモニアというプロのオーケストラと選抜された優秀な学生が共演して、毎週ではないのですが、木曜日の午前中に約一時間のプログラムを無

料で提供するものです。これが最近はいへんな人気で、二〇〇八年度は一三回の演奏会で、入場者の総数が初めて一万人を超えたんです。一回の平均入場者数が八一人ですから、非常に大きな集客力があります。

参加体験型演奏会の試み

大石 「藝大とあそぼう」について、私がこの名前に込めている意味は、「藝大」にはもちろん場所、施設の意味もありますが、そこには先生や学生もいるわけですが、そういったものすべてが「藝大とあそぼう」の「藝大」に込められているのです。とくに小中学生とその親を対象に、ほかの施設で行われているような形ではない「ファミリー・コンサート」を考えようと、毎年いろいろな工夫をしています。

今年初めての試みとなるのですが、音楽学部を開放して、一種のテーマパークをめざしました。奏楽堂だけではなく、音楽学部の校舎内のホールや、教室も使用します。参加体験型の催しですから、子供たちが手づくりの楽器をつくって一緒にアンサンブルをしてみたり、そのような場をできるだけ多く設けたいと企画しました。

これからは、美術学部や映像研究科とも一緒にコラボレーションできるといいなと思つているんです。今回は時間的にも余裕がないなか、デザイン科の学生たちがつくったアニメーションを連続上映する部屋を用意することができました。

薩摩 大学美術館は、外側から見るとどうしても展覧会活動が中心と捉えられがちで

すが、それはあくまでも活動の一部なんです。コレクションの管理や修復、それに調査といった重要な仕事も日常的に行われているのです。そういう意味で美術館はかなり特殊な組織かもしれません。

大学美術館と奏楽堂による共同企画は難しいかもしれませんが、何か一緒にできないか考えていきたいですね。

大石 「パウハウス・テッサウ展」(二〇〇八年四月二六日〜七月二日)のときのように展示している期間に予定を合わせて、それに関連する演奏会を行うなどの企画はどうでしょうか。

古田 展覧会は二三年前から計画を進めているので、予定を合わせるのには難しいかもしれませんが、はじめから両者の予定を合わせた共同企画などは可能かもしれませんね。

松島 コンサートホールについて、私はよく「三位一体」という例えを使っているのですが、奏楽堂と大学美術館、そこを訪れる聴衆・観客の三者がひとつになるようなイベントができればほんとうにいいですね。ホールにとつての「三位一体」というのは、客席の空間、ステージの空間、それからステージの床下の空間のことなんです。この三つの空間がなぜ大切かというと、たとえば弦楽器のなかにはF字孔から見ると「魂柱」という表板の振動を裏板に伝える重要な棒が入っています。弦楽器はこの魂柱と弦、弦を張る駒のバランスがよくないとい響きができません。ホールも同じで三つの空間のバランスが重要だと思っています。

そういう空間の原点はどこにあるのかと

いうと、オランジュのローマ劇場(南フランス、一世紀)やエピダウロスの円形劇場(ギリシア、紀元前四世紀)などです。どちらも野外劇場ですが、ステージから客席までの音の通りがすごくよい。この二つの劇場は「透過力がよい」と私は思うのですが、そうした空間のバランスをホールの音響設計で考えてほしいのです。音響設計の専門家は、「この空間は、残響何秒で音設計しています」とよくいうのですが、聴衆はそういう耳では聴いていないし、感じているはずなんです。

発信の場、 教育の場としての展望

古田 私は藝大の大学院を出たあと、東京

国立博物館で古美術を中心に扱ってました。その後東京国立近代美術館へ移り、現代美術を含む近代美術の展覧会を手掛けて、二〇〇六年に藝大に戻ってきたのです。働く場が変わるたびに美術館の規模がだんだん小さくなっていくんですね(笑)。美術館や博物館は、規模によってお客さんとの関係が微妙に違います。たとえば東京国立博物館は日本国民全員を相手にするというイメージです。言い換えると、ひとりひとりのお客さんの顔が見えてこない。東京国立近代美術館のほうは、近代美術のファンとその周辺、あるいは現代作家と現代美術関連のサークルが少し見えるという感じなんです。

大学美術館は、藝大を見る窓口になっているかもしれませんが、一方で藝大を発信

していくための窓の役割も果たしています。単に藝大はこんなことをしていますというだけではなくて、教育機関として在学生のための高度な教育システムをつくっていく責務があります。その大きな前提のなかで美術館としての役割を果たしていくことが本来の形だと思っております。大学美術館が、学生にとって美術館とはどうあるべきか、展示とはどうあるべきかという専門的な教育をしてもよいのではないのでしょうか。

さらに、芸術教育は学生にかぎった話ではないと発想すると、ほんとうに将来性があるって教育しなければいけないのは、藝大に入る前の年齢層になるわけですね。たとえば「パウハウス・テッサウ展」は、そうした層が目立って多かったです。藝大をめざすというのではなく、小・中学校・高校という裾野に対して、美術を見る楽しさを教える。それが結局、美術に興味を持つ層を広げ、そのなかから作家が生まれるということに繋がるのではないかと思います。

大石 音楽も全く同じだと思います。音楽学部は基本的にはクラシックを中心に教えていますが、当然のことながら音楽にはさまざまなジャンルがあつて、いろいろな楽しみ方があります。芸術性を高めて追求していくというのは本道として、それだけではないということはないと思うわけです。今後もバラエティに富んだ企画を考えることが、いままさに演奏芸術センターに課されている役目だと認識しています。



松島 穆 (まつしま・きよし)

ステージマネージャー—演奏芸術センター
1942年新潟県佐渡生まれ。日本大学法学部卒業。
東京都交響楽団にステージマネージャーとして勤務。
ヨーロッパ各地の舞台環境を見聞するとともに、
東京都交響楽団の海外公演にもステージマネージャーとして参加。
1995年桐朋オーケストラ・アカデミーに赴任。
2004年より現職。

大学美術館

我が国に前例のない 学術的かつ実験的な美術館活動

関出

東京藝術大学大学美術館は本年、開館十周年を迎えました。創造の教育研究現場に位置する本学美術館は、所蔵品の保存修復、展示公開、調査研究、教育普及、及び企画展開催等々、通常の美術館業務とともに、実技系芸術大学における創作活動と社会との直接的な接点となる窓口として、その特性の發揮に全力を注いでいます。

歴代の指導者たちによる蒐集品は、指定文化財三二点を含む、二万八二五七点（平成二十一年五月現在）に達し、それらは美術工芸品に限らず、標本、資料類など多岐にわたり、例をみないコレクションを形成しています。芸術教育と研究のため「芸術資料」や「教材」は、収蔵の来歴とともに本学特有な内容であり、とりわけ学生制作作品（美術八五三四点）や代々の教員作品は、格別な所蔵品となっています。

東京美術学校時代以来の陳列館（昭和四年）、正木記念館（昭和十年）、芸術資料館（昭和四十五年）、大学美術館取手館（平成六年）では、時

間経過のなかで一般公開のさまざまな展覧会が開催されてきましたが、その規模からは「広く社会に開く」までには至りませんでした。

そうした背景のなか、教育研究の成果を積極的に社会に公開することを目指し、平成十一年十月に大学美術館が開館しました。開館から現在までの入館者数累計は、約二七四万六〇〇〇人（平成二十一年三月現在）となり、広く社会に開かれた窓口となっています。

定例の「卒業・修了作品展」「博士審査展（平成十九年度）」「退任記念教員展」「芸大コレクション展」のほかに、毎年企画展が開催されてきましたが、なかでも「開館記念芸大美術館所蔵名品展」（平成十一年・三四万三〇〇〇）、「日本画の一〇〇年展」（平成十二年・一二万八〇〇〇）、「ウィーン美術史美術館名品展」（平成十四年・一五万六〇〇〇）、「横山大観 海山十題展」（平成十六年・九万八〇〇〇）、「興福寺国宝展」（平成十六年・一〇万）、「ルーブル美術館展」（平成十



1948年神奈川県生まれ。
1972年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。74年東京藝術大学大学院美術研究科日本画修士課程修了。
1982年美術学部絵画科日本画専攻助手、83年講師、94年助教授、2001年教授。
2009年より大学美術館館長。

八年・二七万余、「金刀比羅宮 書院の美」（平成十九年・一六万）などは、それぞれの内容とともに入館者数からも特筆される展覧会といえるでしょう。特に「ルーブル美術館展」は大きな反響を呼び、一日平均五〇〇〇人ほどが来学されたため、夏の暑さのなか、大学構内には長蛇の列ができるほどでした。

国立大学法人化（平成十六年）により、大学の社会貢献に関する実績が評価の対象としての比重を増しています。我が国に前例のない学術的かつ実験的な美術館活動は、本学が果たす役割への理解を深めるうえでも大変重要な位置を占めています。内外の大学博物館・美術館等との学術交流や情報交換などの連携協力を図り、一層の充実に向けて事にあたっていくたいと思います。さらなるご支援をお願いいたします。

（せき・いずる／大学美術館館長・美術学部教授）

奏楽堂

演奏家たちが世界へ 飛翔していく窓口

杉木峯夫

一八九〇（明治二十三年）、東京音楽学校校舎として建設された旧奏楽堂は、教育・研究成果発表の場としての重要な役割を果たし、数々の西洋伝統音楽の日本初演の場として使用されてきました。

一九八四（昭和五十九）年、老朽化による奏楽堂解体、上野公園内移築の後、コンサートホール
の不在を解消すべく、一九九八（平成十）年三月に新奏楽堂が建設されました。

新奏楽堂の設計にあたり、日本音楽界のシンボルとして後世に誇れるものであること、音楽教育・研究の場としての機能と音響効果を重視することが設計の理念とされました。特に音響特性においては、ホール全体が優れた楽器であるかのよう
に調和のとれた響きを生み出すこと、さまざまな演奏形態に対応できる残響効果を得られることを考慮した結果、世界で初めての可変式天井システムが採用されたのです。

奏楽堂の一年は入学式に始まり卒業式で終了し

ますが、その有効運用を目的に平成九年、東京藝術大学「演奏芸術センター」が設置されました。

当センターは、本学の特徴を活かした教育・研究の発展と充実の場、幅広い芸術文化の発信基地として、音楽・美術両学部を超え、現在社会が求める演奏芸術の創造、未来に向けた創造活動の研究・実践をおこなっています。

その企画は多岐にわたり、狭い紙面では紹介しきれませんが、「藝大の響き」（音楽学部各講座の枠を超えたインタラクティブな試み）、「奏楽堂シリーズ」（音楽学部各講座の専門性、独自性を活かしたコンサートシリーズ）、「藝大21」（広いパスベクトイブで〈今〉という時代を見つめる企画）、「芸術創造の杜」（現代音楽の夕べ）、「芸大と遊ぼう」（ようこそ！藝大ランドへ）、「学生公募企画公演」、「音楽学部主催コンサート」、奏楽堂トーク&コンサート「学長と語ろう」等々多種多様な演奏会をおこなっています。奏楽堂入場者数は年々増加傾向にあり、二〇〇八（平成二

十）年は六万一千三百一十名となっています。

東京音楽学校から東京藝術大学へと発展してきた百二十年余の歴史のなかで、旧奏楽堂及び新奏楽堂は、本学の社会に向けた窓口として大きな役割を果たしてきました。その一つはここから毎年多くの優れた演奏家たちが世界へ飛翔していったことです。今後はさらに窓を大きく開け放ち、さまざまな角度から見た演奏芸術の企画制作を行うことが求められています。この重要な施設を運営する「演奏芸術センター」の役割は重い。しかしフット・ワークは軽やかに、従来の活動はもとより社会的要請に応じて卒業生の演奏参加、アジアへの重点的芸術文化発信を視野に入れ、新たな展開を計っていきたくと考えています。

奏楽堂と演奏芸術センターが一層の発展を遂げ、世界の芸術文化交流、人的交流に寄与できますよう皆様のご理解ご支援をお願いする次第です。（すぎき・みねお／演奏芸術センター長・音楽学部教授）



1945年富山県生まれ。
1970年東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。
1972年パリ国立高等音楽院卒業後、パリ国立高等音楽院オーケストラ、国立リヨン管弦楽団、(財)札幌交響楽団等で演奏活動。
1986年東京藝術大学音楽学部器楽科助教授、2002年教授。
2009年より演奏芸術センター長。

異界の風景

「創造の源泉」を
あらわにする試み

大学美術館において十月二日から十一月二十三日まで開催される「異界の風景」展は、美術学部絵画科油画専攻が企画する展覧会。現職教員一四名の作品約七〇点と大学美術館所蔵作品約一〇〇点によって構成されます。

本展は、作家であり現職教員である一四名が、自らの「風景」眺めをいかに見だし、描き、表現するか、表現したかを自作で示すとともに、各々の創作の立ち位置から大学美術館所蔵作品を選定し、自作とともに展示することにより、自作との関係を紡ぎ、各々に内在する「異界」創造の源泉をあらわにする試みでもあります。

油画専攻では、「異界の風景」を「創造行為が生まれる場の特徴をとらえた眺め」ととらえ、西洋の絵画を規範として展開してきた本専攻における芸術資料の参照展示と現在の作品を組み合わせた場を創造することにより、この展覧会が「異界の風景」として立ち現れることを願っています。



左：坂口寛敏《バスカルの海—葉山》2007
右：浦上玉堂《青松丹壑図》19世紀

退任記念展

「絹谷幸二

原色の軌跡」

二十二年におよぶ教員生活の
最後の授業

各界との多岐にわたる交流を重ねるなど、広い視野で独自の世界を構築しつつ、後進の育成につとめてきた洋画家・絹谷幸二教授が、二十一年におよぶ東京藝術大学での教員生活に幕を下ろします。

その絹谷教授が、本学から果立ちやがて教鞭を執るまでの軌跡を紹介する退任記念展「絹谷幸二 原色の軌跡」(仮題)が、二〇一〇(平成二十二)年一月五日から十九日まで、同じ学舎である大学美術館において開催されます。

いわば東京藝術大学における最後の授業となる本展では、絹谷教授の若い時代の作品から代表作まで、さらには本展のために描く新作を加えた約五〇点が、知られざる体験談とともに紹介され、絹谷教授の教育者としての思想などを、学生だけではなく学内外のより多くの人々と共有することで、「生きた教育の場」の創出を目指します。

展覧会スケジュール (2009年9月~2010年3月)

大学美術館本館

異界の風景
10月2日(金)~11月23日(月・祝)
入場料 一般1,000円、高・大学生600円
東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展
12月8日(火)~12月20日(日) 入場無料
退任記念展 絹谷幸二 原色の軌跡 (仮題)
1月5日(火)~1月19日(火) 入場無料
まばゆい、がらんどろ
1月6日(水)~1月20日(水) 入場無料
Crest展 (仮題)
1月6日(水)~1月20日(水) 入場無料
第58回東京藝術大学卒業・修了作品展
1月29日(金)~2月3日(水) 入場無料

陳列館

日本画第一研究室発表展
8月29日(土)~9月6日(日) 入場無料
時空をこえたオプティミスト
建築家Borek Sipekの軌跡と作品展
9月16日(水)~10月7日(水) 入場無料
現代芸術DRAWING展—景—
10月14日(水)~10月24日(土) 入場無料
キジル石倉壁面模写作品展 (仮題)
*会期末定 3月中旬を予定

正木記念館

彫刻展示室 (田中記念室) 開室
10月31日(土)~11月23日(月・祝) 入場無料

※開館時間は、10:00~17:00(入館時間は16:30まで)。月曜日休館。ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日に休館することがあります。なお、展覧会によっては、開館時間及び休館日が異なる場合がございますので、その都度ご確認ください。
※展覧会の名称・会期については、変更することがございます。
※本学には駐車場はございませんので、お車のご来館はご遠慮ください。
※展覧会についてのお問い合わせ先
ハローダイヤル Tel.03-5777-8600
大学美術館 Tel.050-5525-2200
※展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧いただけます。
<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

岡山 潔 退任記念

コンサート

ベートーヴェンと
シューマンの室内楽三曲

ヴァイオリン奏者として室内楽を中心に意欲的な活動を行うとともに、本学では室内楽とヴァイオリン実技を担当し、幅広く学生たちの指導にあたってきた岡山潔教授が、二十年間の勤務を終え退任を迎えます。

その締めくくりとしての退任記念コンサートが、二〇一〇（平成二十二）年三月十三日、奏楽堂において開催されます。演奏されるのは、岡山教授が最も深く追究したベートーヴェン（ピアノとのソナタ、弦楽四重奏曲）。そして心から愛したシューマン（ピアノ三重奏曲）の三作品。ピアノの植田克己教授、伊藤恵准教授、チェロの河野文昭教授、山崎伸子教授ら素晴らしい共演者たちとともに室内楽の多彩な魅力を余すことなく紹介するプログラムが組まれています。

有終の美を飾るのは、これまでの演奏活動の集大成として昨年結成された岡山潔弦楽四重奏団によるベートーヴェンの「弦楽四重奏曲 嬰ハ短調 Op. 131」。

金昌国 退任記念 コンサート

薫陶を受けた
奏者たちとの協演

フルート奏者として第一線で活躍するとともに、後進の指導にあたってきた金昌国教授が、本学における二十八年間の勤務を終え退任を迎えます。

その功績をたたえた退任記念コンサートが、金昌国とその藝大の生徒たちと銘打ち、二〇一〇（平成二十二）年三月十四日、奏楽堂において開催されます。コンサートに参加するのは、金教授より薫陶を受けた奏者たち。高木綾子やNHK交響楽団首席奏者の神田寛明など、現在音楽界でソリストやオーケストラ奏者として活躍する教え子たちのほぼ全員が集結し、フルートの華麗なソロ、アンサンブルを繰り広げます。

最後を飾るのは金教授とハーブ奏者篠崎史子によるモーツァルトの「フルートとハーブのための協奏曲」。金教授の万感の想いのこもった響きが繰り広げられます。

奏楽堂 演奏会スケジュール (2009年9月～2010年3月)

藝大プロジェクト2009 V ヘンデル没後250年記念コンサート・オペラ「アリオダンテ」
9月13日(日) 15:00開演 3,000円(全席指定)
藝大21 和楽の美 邦楽で綴る「平家の物語」(後編)
9月16日(水) 18:30開演 3,000円(全席指定)
木曜コンサート(木管・金管)
9月17日(木) 旧東京音楽学校奏楽堂 14:00開演 500円(自由席)
藝大オペラ定期第55回 第1日
「モーツァルト：イドメネオ」
10月10日(土) 14:00開演 3,000円(全席指定)
藝大オペラ定期第55回 第2日
「モーツァルト：イドメネオ」
10月11日(日) 14:00開演 3,000円(全席指定)
木曜コンサート(古楽)
10月15日(木) 旧東京音楽学校奏楽堂 14:00開演 500円(自由席)
藝大フィルハーモニア定期(第335回藝大定期)
「マラー：子供の不思議な角笛」他
10月23日(金) 19:00開演 2,000円(自由席)
モーニング・コンサート11
「平川加恵：風神～オーケストラのための」
「ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.77」
10月29日(木) 11:00開演 無料(自由席、要整理券)
学生オーケストラ演奏会Ⅱ
「チャイコフスキー：交響曲第6番 短調 悲愴 Op.74」他
10月30日(金) 18:30開演 無料(自由席)
東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校
第21回定期演奏会
「J.S.バッハ：ミサ曲 長調 BWV236」
「メンデルスゾーン：交響曲第4番 長調 イタリア」他
10月31日(土) 附属音楽高等学校 14:30開演
整理券または往復ハガキによる申し込み
アジア・躍動する音たち～ミャンマーの音楽家たち
11月1日(日) 15:00開演 2,000円(自由席)

藝大プロジェクト2009 VI ハイドン没後200年～オーケストラ
11月7日(土) 16:00開演 1,500円(自由席)
モーニング・コンサート12
11月12日(木) 11:00開演 無料(自由席、要整理券)
藝大プロジェクト2009 VII ハイドン没後200年～室内楽
11月13・14日(金・土) 旧東京音楽学校奏楽堂
18:30開演 2,000円(自由席)
学長と語ろうトーク&コンサートVI 水中カメラマン 中村征夫氏
11月14日(土) 15:00開演 無料(全席指定)
藝大プロジェクト2009 VIII 藝大フィルハーモニア・合唱定期(第336回藝大定期)
「ハイドン：天地創造」
11月23日(月・祝) 17:00開演 2,000円(自由席)
藝大吹奏楽定期(第75回)
11月25日(水) 18:30開演 1,500円(自由席)
藝大プロジェクト2009 IX 藝大学生オーケストラ定期第41回(藝大定期第337回)
「メンデルスゾーン：劇付随音楽 真夏の夜の夢」
11月28日(土) 15:00開演 1,500円(自由席)
藝大プロジェクト2009 X～うたシリーズ
「メンデルスゾーン：ファニー・メンデルスゾーンの歌曲」(予定)
11月29日(日) 15:00開演 2,000円(自由席)
弦楽シリーズ
11月30日(月) 19:00開演 2,000円(自由席)
邦楽定期演奏会第76回
12月1日(火) 17:30開演 2,000円(自由席)
モーニング・コンサート13
2月4日(木) 11:00開演 無料(自由席、要整理券)
藝大室内楽定期第36回
2月6・7日(土・日) 15:00開演 1,500円(自由席)
モーニング・コンサート14
2月18日(木) 11:00開演 無料(自由席、要整理券)

藝大チェンバーオーケストラ定期第14回
2月20日(土) 16:00開演 1,500円(自由席)
管打楽器シリーズ
2月21日(日) 15:00開演 2,000円(自由席)
岡山 潔退任記念コンサート
3月13日(土) 16:00開演 無料
金昌国退任記念コンサート
3月14日(日) 15:00開演(予定) 無料

※特別お断りのないコンサートの会場は、すべて本学構内の奏楽堂です。
詳細につきましては、9月発行の「平成21年度コンサート・スケジュール(後期版)」をご覧ください。
※平成21年7月31日現在の予定表です。今後、演奏会内容、日程等については、変更することがございます。
※演奏会の曲目、開演時間等の詳細については、決定次第、大学ホームページで発表いたします。
<http://www.geidai.ac.jp/>
※本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。
※チケットの取り扱い
ヴォートル・チケットセンター TEL: 03-5355-1280
チケットびあ TEL: 0570-02-9999
(一部携帯電話と全社PHSはご利用いただくことができません。)
藝大アートプラザ TEL: 050-5525-2102
東京文化会館チケットサービス TEL: 03-5685-0650
※上記演奏会のほか「学内演奏会」の日程については、下記までお問い合わせください。
※演奏会についてのお問い合わせ先
演奏芸術センター TEL: 050-5525-2300
音楽学部附属音楽高等学校 TEL: 050-5525-2406